

## “つくること”の魅力

～張り子のおきあがりこぼし～

久保田 貴美子

### I はじめに

郷土玩具のひとつに、だるまの形に作った人形の底に重しをつけた「おきあがりこぼし」というものがあります。倒してもすぐに起きあがってくる人形のおもちゃです。幼児教育科1年次の図画工作Ⅱの時間では、この「おきあがりこぼし」を作る授業を行っています。見た目の愛らしさと、倒しても起きあがってくる不思議さが魅力の「おきあがりこぼし」を、「張り子」という技法を使って作ります。「張り子」とは、型に紙を重ねて貼っていき、乾いてから型を抜き取って空洞にする技法のことです。基本的には紙とのりがあればできる大変簡単な技法で、もちろん幼児にも可能です。

最近では、なかなかおもちゃを手作りする機会もなく、ましてや郷土玩具などに触れる機会も少なくなってきました。またあまりにも便利すぎる現代の生活の中で、ものに愛着を抱いて大切にするというような気持ちが見失われているようにも感じます。そこで身近な素材を使って、自分で工夫しながらひとつのものを作りあげていくという経験は、将来保育者をめざす学生たちにとって貴重なものになると考え、授業で実践をしています。

### II 制作過程

#### 〈準備物〉

新聞紙、和紙（習字練習用の半紙）、せんたくのり、ボール、のりを入れるカップ、筆、セロハンテープ、石、カッターナイフ、ポスターカラー、ニス

#### 〈制作過程〉

- ①新聞紙を丸めて球体を二つ作り、セロハンテープで軽く止める。



- ②ボールに水を入れ、手のひらサイズにちぎった新聞紙を十分に浸し、そのまま①に貼って



いく（2～3重）。

- ③カップにせんたくのりを入れ、適当な大きさの和紙に筆でのりをつけ、②に丁寧に貼っていく（3～4重、新聞紙が見えなくなったら良い）。この時、底が平らにならないように気をつける。



- ④横にして乾かしておく。そのまま置いておくと、底が平らになるので、適宜裏返したりする。



- ⑤乾いたら胴体の部分で一番太いところをカッターナイフで切り込んで二つに分け、中の新聞紙（最初に作ったもの）を取り出す。この



時、元の位置が分かるよう、鉛筆で印をつけておく。

- ⑥底の部分に重しとなる石をセロハンテープでしっかり貼りつける。（注・セロハンテープは時間とともに劣化するので、本来は和紙で貼る方が良い。また石の形や重さによってはうまく起き上がらない場合もあるので、ある程度重さのある油粘土を使用するなど重しについては、検討の必要がある。）



- ⑦カッターナイフで切り抜く前につけた印を合わせてもう一度、のりをつけた和紙で胴体部分を貼りつけていく。



⑧立たせて置いておき、のりが乾くのを待つ。



⑨乾いたらポスターカラーで彩色し、ニス塗って完成。ポスターカラーは水少なめが良い。



### Ⅲ 学生の感想

・作り方で、中に空洞ができると最初知った時は、とても驚いたし、どうやったら空洞になるのか、とても不思議でした。実際に作ってみて、新聞紙で型を作ってどんどんぬらした新聞紙と和紙を重ねていくことで、乾くと新聞紙を抜いて空洞ができたので、すごく驚きながら作ることができました。どんどん重ねていくところは、きれいな形になるように工夫していくことが楽しかったです。あと、起き上がるのもどうやるんだろうと不思議でしたが、石を下に貼りつけるという意外と単純なものだったので面白かったです。色をつけるとみんな一気に個性的になってかわいかったです。私も、いちごちゃんを作りました。思ったようにできあがったので、とても嬉しかったです。子どもたちも不思議さや楽しさいっぱい楽しめる作品だと思いました。

・最初、こんな安定感のない新聞紙が、見本みたいになるのは大変なんだろうなあと考えていたら、意外と楽しくて、起き上がらないけど、良い“起き上がらないこぼし”になったと思います。そしてたまに起き上がるのも醍醐味です。水につけて新聞紙を貼っていく段階のとき、なかなか頭と体がつながなくて、これで大丈夫かなあと考えていましたが、和紙を貼って中身を取って色をつけていくうちに「すごい！できてきた！」とうれしくなりました。作っていくうちに愛着もわいてきて、可愛いあとすごく思えました。和紙を貼ったばかりで真っ白な物体が並んでいたときは少し怖かったけど、色をつけてできあがったものを見ると、誰ひとりかぶることなくオリジナルの作品ができていて面白かったし、形も一人ひとり少しずつ違ってかわいかったです。これからもたまにはころころ遊びたいと思います。

・あんなに簡単におきあがりこぼしができるとは思いませんでした。あれなら子どもも一緒にできると思います。でも完成してから、自

分のは起き上がらないこともあったのが残念でした。友達のはどんなに倒れても起きあがっていたのでうらやましかったです。石は入れ直したので、たぶん形が悪かったのだと思います。もっときれいにできれば良かったです。次に作る時には、新聞紙や和紙を貼る位置を考えて作りたいです。あと、もう少し小さめに作ると良かったと思いました。しかし一人ひとりが自分の思ったように絵を描いていて、全く違っておきあがりこぼしが出ていたのが印象的でした。ただの作品ではなく、ちゃんとした自分だけのおきあがりこぼしになっていたと思います。絵を描くのは苦手ですが、出来上がるにつれて愛着がわいて楽しくなってきました。今は家のテレビの横に置いています。家族に見せたら、形が変だと笑われましたが、とても楽しかったです。

- ・ 図工の授業で初めておきあがりこぼしを作った。新聞を丸めて作るなど、身近なものを使ってでき、とても楽しかった。子どもには少し難しいかなと思ったが、少し小さいサイズのものなら保育にも生かせるのではないかと思った。また、どうして倒すのに起き上がるのか、永遠に立っているのかなどとても考えさせられるものがあった。作るのが少し大変だった分、出来上がったときの達成感はたくさんあった。最後には自分で作ったおきあがりこぼしに自分の好きなように色を塗ったり、絵を描いたりでき、子どもも楽しめるなと思った。驚きいっぱい制作であった。
- ・ 1回作っておいてから、真っ二つにして中身を取りだして、もう1回くっつけるのが難しかったです。また、なかなか形がきれいにできず、まんまるではなく所々かくかくになったせいか、基本は起き上がるけど、角度によっては起き上がらなくなってしまいました。でもかわいくできて入院していたおばあちゃんにあげたら喜んでくれたので良かったです。おばあちゃんが亡くなる瞬間を誰も看取ることができなかつた中、あのおきあがりこ

ぼしだけがずっとおばあちゃんを見ていたので、私の分も一緒にいてあげられたかなって思いました。今は私の部屋に飾っているけど、見るたびにおばあちゃんのことを思い出します。

- ・ 新聞紙からどうやっておきあがりこぼしを作るのだろうと不思議に思いながら作り始めたが、切って新聞紙を取り出した時はとてもおもしろかった。あの1つのものを作るということだけで、たくさんの驚きとワクワクを体感することができた。さらに世界にたった1つだけのものができ、とてもうれしく思った。そしてきちんと起き上がった時の喜びが最高だった。
- ・ 両手の中におさまるぐらいのサイズが作りたいたいと思い、みんなより少し小さめに作っていたが、新聞紙の上から貼った和紙が乾いて縮こまるということを目撃できなかつたので、完成品が思っていたサイズよりも小さくなった。子どもと一緒に作品作りをする時は、大きめに作ってみようねと声かけをしたいなと経験して感じた。また色を塗る時は、どこを最後に塗るようにすれば、持つ場所に気をつかわず、むらなく塗れるかを考えて塗らなかつた。作品を作っていて、ニスを塗っていく工程が特に楽しかった。塗る前と塗った後では“自分だけの作品”という意識が強まり、大事にしたいなという気持ちになった。子どもとする時は、きつとこだわって塗る子や時間をかけて塗る子、筆の感触を楽しむ子などたくさんいると思うので、十分な時間を取って活動したいと思った。
- ・ 小学生の頃に、気球で同じような作業をしたことがあります。その時は新聞を取ったり貼りつけたりすることがとても難しく、何枚貼りつけたかもわからなくなるくらいでした。小学生の自分にも少し難しいと思っていた記憶があるので、幼稚園の子どもには1人でするには大変な作業だろうなと感じまし

た。しかし多くの作業を経て完成したので、とても達成感がありました。幼稚園などでする時には、援助をしっかりするようにしていき、子どもにも十分な達成感を味わってもらいたいと思います。できあがった作品には、紙粘土で耳などを付けたり、自由に色を塗ったりして、人それぞれの個性があらわれていて、見ても楽しむことができました。

- ・最初先生が作っていたお手本のおきあがりこぼしを見て、どうやって作るのかなあ、中に何が入っているのかなあと、謎に思うことがたくさんありました。作り方を教えてもらって、新聞や半紙や石など身近にあるもので作れることに感動しました。作っている途中も、お腹の部分を切って中の新聞を取り出したり、難しい作業はあったけど、思った以上にかわいくできました。私のおきあがりこぼしは斜めに傾いていて最初はへんてこだと思って嫌だったけど、今はそれがかわいいなと思っています。将来、保育所や幼稚園の子どもと作るのはちょっと難しいかなと思うので、

自分の作ったものを教室に置いたりして、こんなおもちゃがあることを教えてあげたいと思いました。みんなで一緒に作って、一人ひとり大きさや形が違って、とても楽しかったです。

#### IV まとめ

古くから、人間のことをホモ・ファーベル(工作する人)というように、“つくるという営み”は、人間が人間であるための証であると考えられてきました。人間は元来ものを作ることが大好きです。公園の砂場で子どもが夢中になって何かを作って遊んでいる姿からは、人間には生まれながらにもものを作る本能があるのだなと感じさせられます。つまり、人がものを作るということは、ごく自然の行為なのです。自分でイメージしたものをさまざまな工夫を凝らして自分の手で作り上げていく、ここに創作の喜びがあります。うまく作ろうと思わなくても構いません。強い意志と根気、そしてものや人に対する思いやりがあれば大丈夫です。つくることを楽しんでほしいと思います。